

要旨

【目的】 様々な背景を持つ外国人患者のケアに携わる、救急医療施設で働く看護師の異文化間看護の技能と、看護師の持つ特性、ケア時の心理状態との関係性を分析することを目的とする。異文化間看護の技能に影響しうる要因の検討により、異文化間看護における看護の質の向上を目指した効果的な教育的介入を検討する一助となる。

【方法】 本研究のデザインは、既存の尺度を使用して行う横断的研究である。異文化間看護の技能（杉浦, 2003）、基本属性・個人的要因を問う項目、不安（Anxiety）を測定する尺度（Duron, 西田, 中山, 2004）、不確実性（Uncertainty）を測定する尺度（Duron, 西田, 中山, 2004）、日本語版PANAS（佐藤, 安田, 2001）、異文化感受性尺度（Kuwano, Fukuda and Murashima, 2015）、曖昧さへの態度尺度（西村, 2007）を測定用具に用いた。一次、二次救急医療施設の救急外来に勤める看護師を対象に質問紙調査を郵送法で実施した。分析には統計パッケージIBM SPSS statistics 24.0、Amos Graphics 22.0を用いて行った。

【結果】 返信のあった 642 名（回収率 64.1%）のうち、548 名を有効回答とした（有効回答率 54.7%）。異文化間看護の技能において Mann-Whitney の U 検定の結果、「得意な外国語」が「ある」群が「ない」群より異文化間看護の技能得点が高かった ($p = .034$)。Kruskal-Wallis 検定、並びに Bonferroni を用いた多重比較を行ったところ、「臨床経験年数」に関しては「20 年以上」群が「10～19 年」群より有意に得点が高かった ($p = .009$)。「仕事で外国人患者と接する頻度」に関しては「週 1 回以上」群が「年 1～2 回」群より有意に得点が高かった ($p = .002$)。「仕事以外で外国人に接する頻度」では、「週 1 回以上」群が「月 1～2 回」群と「ない」群より有意に得点が高かった ($p = .022$)。共分散構造分析の結果、「異文化間看護の技能」を規定する関連要因のモデルの適合度は AGFI = .626、GFI = .645、CFI = .766、RMSEA = .054 であった。「異文化間看護の技能」への変数及びパス係数はそれぞれ「異文化感受性」が .17 ($p = .037$)、「Uncertainty」が -.33 ($p < .001$) と有意な関連を示した。「Uncertainty」は「異文化感受性」へも -.36 ($p = .002$) と有意な関連を示した。

【結論】 異文化間看護の技能は、異文化感受性の高まりと不確実性の減少が重要な影響要因であることが明らかとなった。外国人患者とコミュニケーションを図る上で、曖昧な状況や言語の壁により不確実性の高い状況が生まれるが、外国人や外国人患者と関わる経験を積むことや得意と思える外国語を持つことなど、対人コミュニケーションにおいて異文化に対して適応できると自信を持つことが、不確実性を減少させ、看護師の異文化に対する肯定的心理や態度、そして異なる文化的背景を持つ患者へのケアを促進する要因となると示唆された。